
そしてそれはとある柏木鷲の話

黒崎ろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そしてそれはとある柏木鷺の話

【Nコード】

N0143Y

【作者名】

黒崎ろっ

【あらすじ】

柏木鷺は恋に破れたばかりの24歳。その旅路の帰路で彼はある女の子とそれなりの出会いを果たし……。

『そしてそれは青春で』のスピノフ的な作品が、気配を殺しつつ登場です。

？なんとなく、出会い（前書き）

『そしてそれは青春で』の1&2の読破後の読破推奨。

いきなり宣伝です。

すいませんでした。

ではどうぞ。

？なんとなく、出会い

あらすじ

専門学校時代の仲間と映画撮影旅行に出かけた柏木君。旅先で想い人二条深雪に告白するも玉砕。しかも同じ旅の面子の高柳浩輔と二条深雪が付き合い始めるといふ複雑な想いしか生まれないイベントに襲われそしてひっそりと一人だけで帰路に就いたのでした。

……………。

……………。

……………。

で、俺はその帰りの電車、ガラッガラの中車の4人掛けボックス席を一人で占領し、うとうと寝ようとしたら。

「あ、お兄さんやっとなきてくれたね」

目の前に女の子が座っていたのはどんな理屈で説明してもらえんだろうか。

「……………だから誰なんだ君は？」

「うにゅ？それは名前を問われてるって事でいいのかな？」

その子は肩まで伸びたさらさらな黒髪を揺らしながら首を傾げる。

どうでもいいがなんなんだろう。あの申し訳程度のツインテールは……。

俺は座布団の四隅に付いたアレみたいにごじんまりと結ばれた髪を見つつ思う。

「私の名前は東雲^{しののめらいな}菜那だよ。お兄さんは？」

当然の如く聞き返してきたし。よく分からない奴だな。

「俺は柏木^{かしわぎしゅう}鷺」

でも名乗っちゃ俺の心の広さに乾杯。

「かしわぎ、しゅう……………じゃあシュー君だね！」

「なぜそうなった？」

間髪いれずに切り込んでみたが、

「んー。このルックスでシュー君。いいかもね」

頭を撫でられた子猫の様に目を細めて笑う姿にちよいと萌えた。

「で、何の用ですか？東雲さんとやら」

「ん？菜那でいいよ。そして特に用は無いよ」

「じゃあなんで俺に声を掛けた？」

俺が聞くと、菜那はちよいと、というかかなりわざとらしく恥ずかしがっている様子を見せた後、

「だ、だってこんなイケメンな人が一人でいたんですもの」

と、のたまった。

「……」

やばい、思考が色々渋滞を始めた。

「……聞いてる？ シュー君」

「聞いている。だから止まったのだよ」

「どゆこと？」

菜那はちよいと首を傾げる。

「俺がお前なら見知らぬ男いきなり、しかもわざわざ寝てるのを起こすような真似はしないがな」

「そりゃそうかもね」

少しの間も空けずに言う菜那。

「だって私とシュー君は違う人間だもん。違う事考えてたっておかしくはないよ」

「……正論だ。だがお前の行動が常識的かどうかの裏付けにはなら

ないな」

俺は言ってから軽いため息をつく。

「俺が悪い奴ではないという確証も未だ無いわけだしな」

「あ、それはなんとなく分かったよ」

「ん？分かった……？」

何が？と訝しむ俺の視線をどう受け取ったのか、菜那は満面の笑みを浮かべ、

「こんな訳の分からない見ず知らずの女の話聞いてくれてるんだからシュー君はいい人だよ」

「……そうやって信用させて油断を誘うつもりだとしたら？」

「つもりなの？」

真っ直ぐな菜那の瞳。俺は気圧される様に言葉を吞んでしまう。

「ほらやっぱり」

菜那はそんな俺の顔を見て、今度は優しい微笑み。

「シュー君は悪い人じゃないよ。自信持っていいかも」

「……明日からそうする」

俺は観念したとばかりに窓外に目を向ける。

外はまだ緑一杯の癒しの光景が続いている。都会の喧騒まではまだ時間が掛かりそうだ。

「迷惑だったかな？」

さっきより少々テンションの低い莱那の声。

「もし迷惑だったら最後にシュー君の連絡先ゲットして私は姿を消すよ」

「あまり潔さを感じないのはなぜだ？」

しかし俺自身は嫌な気はしない。うん、しないな。

「それも嫌だって言われたら……目に見えて凹みながら去るけど？」

莱那は少しだけ腰を浮かせる。

「……いたきやいてもいいぞ」

気付けば俺はそう口にしていた。

「俺も一人で退屈してたところだ。話相手くらいにはなれるかもな
後から考えれば、俺は寂しかったのかもしれない。

恋に破れ、身内が結婚して、なんかこう人恋しくなっていたのかも
しれない。

だから、俺は目の前の東雲菜那からの突然のコンタクトを受け入れる事にした。

「ホント！やったね！」

にぱぁ、と笑顔になる菜那。

こいつも俺如きの相手で喜んでいる様だしな。

たまにはこついつのも悪くはあるまい。

？なんとなく、出会い（後書き）

ひっそり続きます。

では次回。

？それとなく会話？（前書き）

この話の元である『そしてそれは青春で』の『2』を読み返してみました。

そして主人公である工藤一馬君に抱いた感想。

「こいつバカだ」

作者は誰だ。

私だ。

なんだこれ。

？それとなく会話？

人は誰しも一人では生きていけない。そんな事は誰に教わるまでもなく、又問う迄もなく当たり前の事実。

それは俺とて知っている。それ故だろうか。一人でいるとふと寂しくなるのは。

だからだろうな。俺がこいつ、東雲莱那を受け入れたのは。

「シユー君、ポツキーゲームした事ある？」

莱那はまさにポツキーをくわえながら言う。

「そんな甘ったるいイベントは未経験だ」

俺が悲しくも考える迄もなく即答すると、莱那はポツキーをくわえたままにやり。

嫌な予感しかない。

「じゃあシユー君の初めては私がうば」

「やらないからな」

的中したし。多分今日の嫌な予感的中率は100%だろうな。

「えー。なにゆえ？」

菜那は長らくくわえていたポツキ―を哀しげにポリポリ食べると、
変な単語に疑問符を乗せてきた。

「俺にその気がないからだ。あと口の周りにチヨコ付いてるぞ」

「なんと」

菜那はペロリ舌を出してチヨコを舐め取る。

「……」

なんかちよつとばっかしエロいなあ、なんて思った俺を狙撃するな
ら今だぞ。カモン、ヒットマン達！

「……何難しい顔してるの？」

難しい顔をしていたらしい。

「いや、にしても空いてるなあと思ってな」

何気なく口にしてから車内を見回したが、俺達以外の客がそもそも
いなかった。

「言われてみれば……。はっ！今ならなんでも出来るじゃん！」

この女の思考はそれ以外に何かないのだろうか？

「選択肢は無限だな。という訳で俺はそこから何もしない、を選
択する」

「やらない後悔よりやった後悔の方が後々ダメージはないから、さあ！」

「だから何をする気なんだお前は！」

しかしまあこう積極的に仕掛けられてしまうと少し気持ちが揺らぐが、これがあるか、繊細な男心ってやつか？

……違うな。うん。

「……………やっぱり変なのかな？」

「何がだ？」

突然菜那がトーンダウンしだした。

「いや、初対面の男性にこうやって仲良くなろうとあれやこれやしようとするのって」

「お前の言ってる事は普通だ。しかしお前のやってる事は……………普通じゃないかもな」

なんとなく思っただけを真面目に口に出してしまった。

「そっかあ……………。でもあれだよな。やっぱりシュー君は優しいよね」

「なぜそこにプレイバックする？」

そして今のどこに優しい要素があったと言っただけ？

「私のしてる事が普通じゃない。でもあなたは私をここにいていいって言ってくれた。しかも普通じゃない事をわざわざ忠告してくれた。で、イケメン。なかなかいいよそんな人」

最後の単語に妙に力を感じたのは気のせいだろう。うん。

「……まあでも、それがお前の個性なんじゃないか？」

「個性……。学校の先生なんかよくその言葉を口にしたよ。東雲さんは個性的だねって。………個性的って何？」

菜那の言葉に少々刺が生えてくる。やばい、触れちゃいけない部分だったか。

「『らしさ』って事を言いたいんだろうけどさ、どうなんだろうってずっと考えてた。個性的って言葉はさ、結局はその人を肯定も否定もしない曖昧な天秤なんだよ。どっちにも傾かなくてイライラすらしてくる」

「やたら噛み付くな」

「……ごめんなさい。ちょっと嫌な事思い出しちゃった」

反省の意志だろうか。菜那が少しシユンとする。

その姿に今までの傍若無人な態度とのギャップを感じて少々笑みをこぼしてしまう。

「……笑ったね？」

咎めるような視線と言葉。

いかんいかん、と俺は言葉を紡ぐ。

「いや、今は決してお前の言葉を笑った訳じゃない」

俺はそこで区切り、菜那が納得したような表情をしたのを確認してから、言葉を繋ぐ。

「確かにお前の言う通り個性なんて言葉は実体の無い、説明しろと言われたら『らしさ』とかその辺の言葉に落ち着くだろう」

「うん……」

「それがいいか悪いかは俺には分からない。多分個人の個性の好き嫌いなんてのはそれこそ個個人の感性でしか判断出来ないだろうよ」

「そう、だよね……」

「……そんな中、俺はお前の個性、結構好きかもな」

「え……?」

菜那の顔が止まる。驚いたまま止まる。

「……………おう」

そして俺はさらりと口から出てきた言葉の意味に気付く。

「ふ……不意打ちは卑怯だと、思う……な？」

莱那が俺から視線を逸らし人差し指同士を合わせてモジモジし出した。

こんな一面もあったのね。良かった。恥じらいの一面がちゃんと存在して。

……。

……じゃなくね？

俺は自分の軟派な言霊をどうにか冗談めかそうと言葉を探る。

「まあ、こうやって認めてくれる奴もいるんだからお前の個性も……あれだ、魅力があるんだよ！」

「……も、もう！急にそんなに言われたら嬉し恥ずかしだよシユー君！」

そう言っつて輝かしい程に笑顔。眩しいです莱那氏。

そして確実に墓穴掘ったな俺。

俺は軽いため息を一つ。で、莱那をちらり。

「えへ、えへへ……」

こっちが気恥ずかしくなる程の笑顔。実際恥ずかしいし。

だが、

……もしかしたら、墓穴掘ってないかもな。

よし、真相は次回に持ち越しでよろしく。

？それとなく会話？（後書き）

前書きに言葉が足りなかった。

工藤一馬君は、

「愛すべき？バカ」である。

とかね。

では次回。

？それなりに合致（前書き）

そおい！

これが午前4時手前のテンションです。

乱高下です。

？それなりに合致

恋愛の理由なんていつも後付けだ。

数学の方程式じゃあるまいし、『ここがこうだからこう』みたいな明確な決まりはない。

恋愛に、いや殊人間の行いに『絶対にあり得ない』なんて言葉は存在しないのである。

つまり、俺と菜那がこうして膝突き合わせて喋ってるのはそういう意味で『あり』な現実なのである。

「シユー君って彼女いるの？」

今更な質問である。

「いないな。……いないな」

「二回言う事の意味は分からないけど……そうなんだ」

「ん？」

てっきりいないと言えば喜ぶかと思ったがそうでもなかった。

……こう言つと俺が自意識過剰みたいだな。

「聞いてきた割にはリアクション薄いな？」

「いやあ……なんか私巧いことあしらわれちゃってる気がするからさ。女性の扱いそのものの経験値が高いのになって」

菜那は言っというて自分でうんうん頷く。納得のつもりだろうか。

「異性交遊という意味では経験値は残念ながら低いと言わざるを得ないな」

「イケメンなのに？」

「イケメンでもだ」

キリッ

その時の俺に効果音つけるならこんな音であってほしい。

「なんか開き直られた」

「否定されなきゃこっちのもんなんだよ」

よく分からない会話である。我ながら。

「……あ」

そこで俺はある可能性に気付く。菜那が言っところの『経験値』について。

「どしたの？」

「俺には姉がいるんだよ」

「へえー」

話の全体像が見えないからだろうか。菜那のリアクションが若干雑だ。まあ仕方ないが。

「うちの姉は昔からのんびりな性格でな。なにかと俺が手を引いてやる事が多かったんだよ」

「へえ。いいなあ、こんなイケメンの弟にリードしてもらうなんて」

「で、姉は身内ながら一般的に『綺麗』の枠組みに余裕で入り込める容姿の持ち主でな」

俺は身内のひいき目でないことを証明する為に、姉の写メを見せる。

「どれどれ……。わ！本当に綺麗だ」

菜那が納得したところで話を続ける。

「そんな姉の世話をしてきたから自ずといわゆる『経験値』が少しは溜まってるのかもな」

「なるほど。そんなに綺麗なお姉さんなら納得かも」

「ちっとも色気のない結論だな」

俺は苦笑い。

「……同じかも」

「ん？」

菜那のポツリとした呟き。俺は目ざとく引っ掛かる。

「あ、いや、シュー君のそれとはちょっと違うかもだけど……私もそういうのなら身に覚えがある、かな」

「ほう」

俺は齒切れの悪い菜那の言葉に、更に興味をかきたてられる。

「……私ね、お兄ちゃんがいるんだ。でね、お兄ちゃんは小さい頃から野球一筋の人だったの」

「で？」

俺は続きを促す。

「うん。だから野球の实力は折り紙付きだったんだけどそれ以外が見事に壊滅的にダメダメでね」

見事に壊滅的。妹にそう言わせる兄貴って一体……。

「だから勉強とかその他諸々私が世話焼いていたんだよ。もうなんか軽く義務感感じてたね」

「なんとなく共感を覚えるエピソードだな」

「……でもね、そんなお兄ちゃんもちゃんとした会社就職してね。」

で、どこで見つけてきたのか綺麗で優しい女の人とね、最近結婚したんだ」

「……」

共感どころではなかった。誰かが仕組んだのかとすら一瞬思った。

「な、なんで黙っちゃうの？」

俺が沈黙した意図が分からない菜那は不安気な表情。

「いや……こんなことってあるんだな」

「な、何が……？」

「……俺の姉も最近結婚したんだよ。アホな位真っ直ぐない男にアホな位惚れられてな」

「なんかその人がアホだ、みたいに聞こえるのは私だけかな……でも、そうなんだ」

菜那は不安気な表情から穏やかなそれに変わる。

「じゃあ、私の感じた寂しさは分かってもらえそうだね」

「ああ、分かってくれれると思う」

電車が途中駅に停車する。俺は駅の名前を確認するが、下車まではまだかかりそうだった。

？それなりに合致（後書き）

……。

今落ちています。

では次回。

？なんなりと収束（前書き）

るーるるるるーー。

キツネを呼んでいます。

？なんなりと収束

信頼とは時間によって培われるのだろうか。

それとも何か信頼するに値する出来事さえあればそれでいいのだろうか。

恐らく両者とも正解だろう。でなければ、

「シユー君窓の外見ながら何ぶつくさ言ってるの？」

今の状況にうまく説明が出来ない。

兄弟話で意外な共通点を見つけてしまった俺達は、ちょいとばかり距離を縮めた様に見えた。

……物理的に。

具体的に言つと菜那が俺の隣に来た。

「〜」

しかもなんか機嫌良さげだ。

これはあれだろうか。俺の隣に居られる事が嬉しいという事だろうか？

会って一時間ちよつとの男の隣で。

……。

だがしかし俺自身、変に嫌になる気持ちは湧いてこなかった。

こいつに、莱那に対する気持ちが多少でも変化しているってことだろうか？

それとも失恋の傷を塞ぐ何かを探していて莱那が非常に都合が良かったからか？

後者だったら俺最悪と言わざるをえないな。

うん、という訳で後者は却下。前者でいこう。

……だとしても果たして俺の中でこいつに対して変わりつつある気持ちってなんだ？

恋？愛？……そんなはつきりしたものじゃない。もっとぼんやりとしたものだ。

決して不快にはならない、ただぼんやりとしたもの。

俺は何気なく莱那を見る。

こいつは一般的に見たら可愛いと言って文句は言われないレベルの持ち主だ。

加えて性格も、ちょっと癖があるとはいえ人懐っこい……例えるな

ら猫みたいな奴だ。

変な奴には違いないが、しかし俺自身気を許している。間違いない。
普通に考えたら有り得ないだろう。

初対面の異性にこうも図々しく交流を迫ろうとする、そんな変人と
普通に交流を深めようとしちゃってる、変人。

……ん？どっちも変人だから問題ないのか、もしかして。

……んなこたないか。

このまま恋仲にでもなるうものなら、あれだな。それはどのマンガか小説のお話ですか？みたいな反応が来そうだ。

……。

悪くないかもな。そんな話も。

これも神様の仕組んだ縁かもしれない。

そう考えるとなんだか色んな『普通なら受け入れない』事が受け入れられそう、そんな不思議な気持ちになる。

ま、俺も生粋の変人って訳だな。ははっ。

……。

自分で言うとなんか面白いが人に言われたら多分殴るな。なんかム

力つくから。

どちらにしろ今この状況を心地よく思っている自分がいることは間違いない。

だとして、そこから俺が何をすべきか……。

恐らく何もしないでいいんだろうな。

それは文字通り何もしないという訳ではなく、このまま空気の流れるままに感じるままに過ごせばいいのだろう。

という訳で時間は順調に過ぎている。

長いだろうと思っていた電車の道のりも気付けば後数駅。

つまりこいつとこうしてられるのもあとわずかって訳だ。

「もうすぐだよ」

「んあ？」

考え事をしていたからだろうか、間抜けな声をあげてしまった。

「あとちよつとで着いちゃうね」

「名残惜しいか？」

ちよつと冗談っぽく、ちよつと本気っぽく、微妙なニュアンスで俺はその問いを口にした。

「惜しいね」

そのニュアンスをどう解釈したのかは分からないが菜那はけろっと答えてきた。

「そか」

俺は菜那の感覚がむしろ理解出来ず、それ以上言葉が続かなかった。

「シュー君は名残惜しんでくれる？」

そのなんでもない様な感じで聞き返してくるのが悔しかったから、

「全然」

嘘をついてやった。

「ガーン」

擬音を口にしてきた。

「それどころか文句が山程ある」

「ズガガーン」

「だが残りの時間ではいい切れそうにない……」

俺はポケットから『それ』を取り出す。

「？」

莱那はその意図が分かっていないのかキョトン顔。

「後日まとめて言うから番号教えろ」

「え……………。は！よ、喜んで！」

理解に至ったらしい莱那は『それ』、つまり携帯を取り出す。

こうして俺の電話帳に変人、もとい東雲莱那の名が刻まれる事となった。

後日、このやり取りを思い出して自爆しなくなったのはまた別のお話。

電車が降りるべき駅に着いたのはそれから間もなくのことだった。

？なんなりと収束（後書き）

電車が到着してしまったという事は……。

では次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0143y/>

そしてそれはとある柏木鷺の話

2011年12月13日00時53分発行